佐伯通信
2012年8月（平成24）
第11号
発行
佐伯泰英事務所
担当／幻冬舎
禁・無断転載

至福の日々

写真／タカオカ邦彦

「職人作家の独りごと」にも書いたので恐縮至極だが、久しぶりのハードカバーを出版した。岩波書店六月刊行のエッセイ集『惜櫟荘だより』だ。ふだん文庫書き下ろしの時代小説ばかりやっているので本造りの楽しみを忘れていた。旧岩波別荘の完全修復話だ。

内容が内容だけに、カバー、表紙、口絵、本文と馴染みの風景の写真をふんだんに使って楽しい本造りだった。装丁は桂川潤氏で活字本の装丁を熟知した人だけに、「これ、私の本かな」と首を傾げるほどにお洒落で上品な仕上がりになった。

その上、おそらく一生に一度だろう、題字が金箔押し、なんとも豪奢。岩波書店の『図書』で二年にわたり連載した文章に手を加えて、写真を添えて本にしたものだ。縁あって岩波別荘を譲り受け、後世に残す

佐伯泰英／近刊のお知らせ

2012年 9月 14日発売予定

《講談社文庫》
交代寄合伊那衆異聞 17
『散切（ざんぎり）』
（「佐伯通信」第12号が入ります。（初版 初回出荷分限定））

2012年 10月 11日発売予定

《光文社文庫》
吉原裏同心 17
『夜桜』

《双葉文庫》
居眠り磐音 江戸双紙 40
『春霞ノ乱（仮）』

2012年 11月 15日発売予定

《ハルキ文庫》
鎌倉河岸捕物控 21
『春の珍事（仮）』

近刊・作品情報はこちらでもチェックできます。
http://www.saeki-bunko.jp　佐伯泰英 ウェブサイト　検索

この「佐伯通信」は、佐伯泰英事務所が下記出版社の協力のもと年六回発行いたします。
㈱幻冬舎、㈱講談社、㈱新潮社、㈱双葉社、㈱光文社、㈱角川春樹事務所

江戸の伝統を今に伝える逸品

㈱幻冬舎 編集局　森下康樹

「酔いどれ小籐次留書」シリーズの三五〇万部突破記念として募集した、特製（銀製プレート）ストラッププレゼントに数多くのご応募を頂き、ありがとうございました。当選者の発表は賞品の発送をもって替えさせて頂きましたが、その後、実際にどのような物だったのか、という問い合わせを少なからず頂戴しました。

ということで、左上の写真が賞品です。東京・三筋で今もその伝統を守り続ける東京銀器伝統工芸士・二代目上川宗照氏の手によるもの。東京銀器の歴史は江戸時代に遡り、『人倫訓蒙図彙（じんりんくんもうずい）』という当時の職人図鑑にも「銀師（しろがねし）」の名で紹介されています。

今回の賞品も、昔ながらの技法で一つ一つ精魂込めて作られました。もしかすると、宗照氏の何代か前の銀師が江戸の往来で小籐次と行き合っていたかもしれない、そんな想像さえ掻き立ててくれる逸品です。

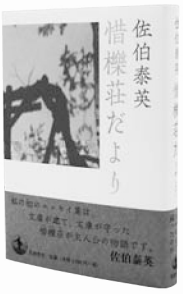
二代目・上川宗照氏

忠義をつくす主はただ一人
想いを寄せる女性もただ一人
酔いどれ小籐次留書 一～十八（＋「青雲篇」）
幻冬舎 時代小説文庫

ために築七十年の数寄屋造りを完全修復した記録だ。

この建物の施主は岩波茂雄、建築家は現代数寄屋の名手吉田五十八だ。戦中に建てられた木造家屋だが、七十年を経てそれなりに傷みが生じていた。そこで今後の百年を考えて、基礎からやり直すために瓦を下ろし、床板を剝ぎ、壁は土に戻し、空地に返した。新築扱いの修復で新築するより手間暇と費用がかかり、匠の技術と経験が要った。それだけに優秀な技術集団がこの修復に集まってきた。

職人作家を自認する私は職人の手仕事を見るのが大好きだ。日本でも有数の棟梁らの技を間近に見ることのできた歳月は至福の日々だった。そんな徒然の修復観察日記に交流のあった先輩諸氏の作家の思い出をちりばめた書だ。



出版社からのお知らせ

《講談社文庫》
『惜櫟荘だより』には「文庫が建て、文庫が守った惜櫟荘が主人公の物語です」と佐伯先生のおび文が入っています。講談社文芸文庫には『惜櫟荘主人――一つの岩波茂雄伝』があります。著者は岩波文庫創刊に尽力された岩波中興の祖、小林勇氏。二つの惜櫟荘の物語からは、時代や立場は違えど出版文化を担わんとする静かな気概を感じることができます。ぜひご併読下さい。なお「交代寄合伊那衆異聞」では9月14日刊行予定の次作『散切（ざんぎり）』に併せ既刊フェアを開催します。店頭で「おおっ」と言っていただける大胆な仕掛けを熟慮中。詳細は弊社当番の「佐伯通信」次号にて！